

ヤクザのおじさんに執着されて、ペットになりました  
ゞ躰という名の溺愛トロトロ交尾セックスに絆されるお話し

「来ちゃつた♡」  
「龍哉さん……」

アパートの部屋の前で、ヤンキー座りをしている男性を見下ろす。

推定四〇代、やたらと整った顔、派手な柄シャツ、スラックス、無精ヒゲ。プラスハーフアップ。

見た目を羅列すれば「明らかに反社」に他ならないが、私はこの人と週に一回のペースで会っている。

というか、週に一回のペースで待ち伏せされている。

「そろそろ警察呼びますよ」

「つれないこと言わないでよ利香ちゃん、俺まだ君に全然恩返しできてないのに」  
「十分していただきました。これ以上は過失です」

「お礼に過失とかある？」

私の言葉に龍哉さんはケラケラ笑った。そして、そばに置いてあつたビニール袋を掲げる。

「でも、お腹空いてない？ 今日は餃子作つてきました～」  
「……！」

ごくりと唾を飲み込む。餃子。

朝から機嫌の悪いお局をいなしながら、やたらと忙しい金曜日を乗り切ったのだ。

これに、ビールを、ぐいっとできたら。

「ビールもありま～す」

負けた。

疲労と食欲に負けた私は、こうして今日もまた彼を部屋に入れてしまつたのだつた。



事の発端は、二ヶ月前にアパートの階段で血まみれの龍哉さんを見つけたことからだつた。

帰り道、パトカーの音がずっと鳴り響いていた。チカチカする赤色灯を眺めながら「何かあつたんだろうか」とぼんやり思つていたけれど、多分、この人が関係しているのだろう。直感的にそう思つた。

「やあ、こんばんは」

龍哉さんは、虚ろな目で私に挨拶をした。恐らく、威嚇のようなものだつたのだろう。目だけで「早くここから立ち去れ」と言われているように感じた。

しかしながら、頭部と左腕からの出血、無数の打撲や切り傷を見てしまつては、恐怖など感じる暇もない。看護師として、放つておけないと思つた。

一度部屋に戻つて救急箱を用意し、彼の元へ戻つた。彼は、私の姿に目を見開いて「マジ?」と笑つた。

「マジです。看護師なんで」

「うら若き女性がこんな悪い男に関わるもんじやないよ。見ての通り、ちゃんと  
した社会で生きてないよ？」 おじさん

「だからって怪我人を無視できません。それができたら、私は看護師になつて  
ませんよ」

「……馬鹿な子だねえ」

「通報されたいんですか？」

「いやいや、とんでもない。ありがとう。惚れちやう」

「そういうのはいいです。そもそも、職場にもあなたみたいな人は山ほどやつて  
くるので」

「なるほど、慣れてんのね」

軽い手当をしながら、少しだけ話をした。

彼は龍哉と名乗り、「ちょっとした喧嘩に巻き込まれている」と言う。

「ちょっとした喧嘩……」

「巷では抗争とも言うね」

「早く帰りたいです」

「正直者お」

「でも……」

「ん？」

龍哉さんの出血箇所に目を向ける。思ったよりも深く、このまま手当をするには少し怖さがあった。

「頭と腕の傷……は、さすがに一度洗った方がいいかなって  
「部屋に入ってくれんの？」

「……」

にやりと試すように笑われ、少し嫌な気持ちになつた。「さすがにそれはできないでしょ?」みたいな、意地悪な顔。

(……でも、もう乗りかかった船だし)

やつてやろうじやないか。看護師舐めんなよ、意地の悪いお局に何年揉まれて  
きたと思ってんだ。

「流すのだけ、うちでやりましょう」

「いやいやいや、マジ？ 俺が言うのもなんだけど、大丈夫？ 意外とワンナイ  
トとか慣れてんの？ おじさんそういうの感心しないよ、自分を大切にしな  
「本当にあなたが言えることじやないですね。嫌ならしいですよ、このまま何か  
しらの菌に冒されて腕を切り落とすようなことにならなきやいいですけど」

「え？ そんなにヤバいの？ これ」

「傷口からの感染は気をつけた方が良いです。そういうナイフって、消毒してな  
いでしよう？」

「してたらヤクザしてないね。あ、言つちやつた」

「言つちやいましたね」

「えー、でもなあ」

「そうやつて迷つてくれるなら私にとつては『家にいれてもいい人』です。大丈  
夫です、一一〇の画面ずっと出しとくんで」

言つてる自分でも、変な交渉だなあと思つた。でも、どうしても目の前の男性が悪い人のようには思えなかつた。

私がスマホを見せると、龍哉さんはへらりと笑う。

「うん、それがいい」

職場でも思う。結構、こういう界隈の人が優しかったりするよなあ。お局も見習つてほしいものだ。



それ以来、龍哉さんは毎週「この前のお札に」と食事を差し入れしてくれるようになつた。彼は意外にも料理が得意らしく、毎回とてつもないクオリティの食事を提供してくれる。

一人暮らしをしていると、他人の作つたご飯が本当に美味しい。龍哉さんの緩い会話にも絆され、私は何だかんだと毎週彼を家に入れてしまつていた。

「仕事の方はどう？」

「親戚のおじさん？」

「まあ間違いなくおじさんですよ」

二人で餃子とビールを食らい、テレビを見ながら雑談をした。

龍哉さんを家に入れてしまうのは、こういうおじさんムードが多いからでもあるだろう。

彼から性的な目で見られないと感じる瞬間が、一度もない。それはそれで自分の色気のなさに少し落ち込むが、関係性としては好ましいものだつた。

「今日もお局が一人でブチ切れました

「更年期つてやつかねえ」

「でも昔からああらしいんですよ。よくあんناに切れられるなあつて思います」「溜め込んでるんだろうなあ。そういうやつはそのうち大概自滅するよ」

「するなら早くしてほしいです」

「辛辣う」

「本当に転職しようかなあ」

「看護師辞めるの？」

「んーそれも迷つてます。新しい病院探すか、他の職業やるか。でも今更、他の職業できる気もしないし……」

「じやあ、俺に飼われる？」

かわれる？ 買われる？ 代われる？ あ、飼われるか。

一瞬どういう意味か分からず、きょとんと龍哉さんを見てしまつた。龍哉さんはへりりと笑つてゐる。いつもと同じ笑みだつた。  
だから、冗談だと思つた。

「それもいいかもですね」

だから、安易にそう答へてしまつた。

次の週、龍哉さんは来なかつた。

連絡先の交換をしていないから、理由なんて知りようもない。そもそもお返しはもう十分だつたのだ。

お別れもなくあつさり終わつてしまつたのは少し寂しいけれど、そういうものだろうと割り切つた。



（あ～～～無理！ なんだよあのクソババア！ 更年期なら漢方でも飲んでろ！ 何であんな言い方されないといけないんだよクソが！ あ～～あ！ マジで！ マジで！ マジで転職しようかな……）

龍哉さんが来なかつた週の翌週、帰り道のことだつた。

お局の嫌味が頭の中でリフレインしては、怒りが湧き上がつて涙が零れそうになる。やるせなくて、恥ずかしくて、情けない。

転職、転職、転職、と脳内がその単語だけで埋め尽くされながら歩みを進める。すると不意に、聞き覚えのある声に名前を呼ばれた。

「利香ちゃん」

思わず振り向くと、そこには龍哉さんが立っている。

相変わらず派手な柄シャツを着た彼の横には、黒塗りの高級そうな車が停まっている。

街灯に照らされる龍哉さんの顔には濃い影が落ちて、掘りの深さが際立つていた。

「龍哉さん……」

「久しぶり」

「びっくりしました。もう鶴の恩返しは終わつたのかと」

「うん、これからは桃太郎かな」

「はい？」

「きび団子あげるから、おいで」

「え？」

戸惑っていたら腕を引かれ、あつという間に車に押し込められてしまつた。煙草のにおいがする車内には、ラジオも音楽も流れていない。エンジン音と革張りのシートの冷たさに少し怖くなり、龍哉さんに声を掛けた。

「あの、龍哉さん」

「ごめんね、結構準備に時間がかかっちゃつてさ」「準備つて……」

「いい部屋が用意できたから、楽しみにしてていいよ」

「え、あの、龍哉さ……つ」

怖い。怖い。怖い。

話が通じていない気がする。あんなに温和で、気の良い『おじさん』だつたはずなのに、今日の彼はどこかおかしいと思つた。

「今日から俺が、利香ちゃんの飼い主だよ」



「ほら、どう?」

龍哉さんの異様な雰囲気に気圧され、あれよあれよとタワーマンションに連れ込まれてしまつた。

モデルルームのように綺麗な部屋だつた。広いリビング、カーテンのいらない大きな窓ガラス、高級感溢れるオープンキッチン。私の月給では、到底借りられない絢爛さだ。

「どうつて……」

「せつかくだからいいところ借りちやつた。こういうことでもないと金も使わないしね」

「えつと、龍哉さん……。その、この前の飼うつて話、もしかして本気に……」

「もちろん本気だよ？」

「！」

恐る恐る聞いてみたが、返ってきた眼差しにまた恐怖が襲ってきて言葉が発せなくなつた。

龍哉さんじやないみたいだ。でも、正真正銘、龍哉さんだ。

言つていることは怖いのに、車から降りるときもエスコートしてくれたし、私を思いやつてずっと声を掛けてくれている。……のに、何で、こんなこと。

「ちやーんと録音もしてるし」

龍哉さんは穏やかに言うと、スマホをついつと触つて、画面をタップした。先日の会話が、高層階の静けさを孕んだ室内で繰り返される。

「俺に飼われる？」「それもいいかもですね」。

確かに言つた。言つたけど……。

「おかしくないよ。口約束だろうが、ヤクザに餌われるの了承しちやつたからね。」

「利香ちゃん自身が」

「ただの冗談……っ」

「ヤクザにそれが通用したら、警察いらなくなつちやうからね」

「……！」

咄嗟にポケットのスマホに手を当てた。一一〇番。

そうやつてスマホに繋る私を見て、龍哉さんはふふっと笑う。

「警察呼ぶ？ やめてほしいなあ」

「だ、だつてこんなの……！」

「そんなもんだよ、俺たちの世界は」

「龍哉さん、おかしい、いつもの龍哉さんじや……」

「あれも俺だし、これも俺。もしかして、利香ちゃんの職場に来る同業にも『優しい』なんて思つてた？ そう振る舞うに決まつてるじやない。警戒されてるの分かってんだから、こつちは」

「そんな……！」

「馬鹿な子だねえ」

初めて会ったときも、同じことを言われたような気がする。善意でやつたことが、どうしてこんなことに。

固まる私に龍哉さんが近付く。そしてスッと私のポケットからスマホを取り出すと、それをキツチンへ持つて行つた。

「龍哉さ、」

龍哉さんは私の声を無視して、キツチンにあるお鍋に水を溜めた。半分以上水が溜まると、そこに向かつてスマホを落とす。

ボチヤンツ

「！」

「しばらく浸けとこうね」

「……つ」

料理をしているようにそう言つた龍哉さんは、こちらに戻つてくると優しく私の手を引いた。

「ま、ちょっとゆつくりしようよ。お仕事お疲れ様」

逆らえず、一緒にソファに腰掛ける。高級そうな黒の革張りのソファが、ぎしりと嫌な音を立てた。

「やあつと、俺の物になるね」

「た、龍哉さん……」

「ん？」

「ご、ごめんなさい、私、こんなことになるなんて思つてなくて……つ

「怖がらなくていいよ。利香ちゃんはこれから何も心配しなくていいんだから。

仕事も行かなくていいし、お金のことも気にしなくていい。ここで俺の帰りを待つてくれるだけでいいんだ」

「何で……つ」

「何でつて、利香ちゃんのことが大好きだから意外にないでしょ。あんなに優しくされて惚れない男はいないよ。まあ、これから利香ちゃんに惚れる男がいようもんなら一人残らず消すけどさ」

「……！」

「ああごめん、また怖がらせちゃったね」

私の表情を見た龍哉さんは、落ち着かせるように私の肩を抱き寄せた。そして、額にちゅつとキスをする。

怖い。怖いけど、何だろうか。どうしてこんなに、変に、ドキドキしてしまつてるんだろうか。

龍哉さんの声とキスが、いつも以上に優しいからだろうか。

「俺はね、利香ちゃんみたいな子には幸せになつてほしいのよ。これはお互いのためでもあるんだからさ、もう委ねちゃつてよ」

「でも……っ」

「でも？ 何か困ることあるかなあ。利香ちゃんは嫌な仕事を辞められる、生活にも困らない、俺も利香ちゃんがいたらハッピー。ウインウインじゃない？」

首を傾げて龍哉さんが聞いてくる。大きくて無骨な手が私の荒れた手をぎゅつと握り、今度は頬にキスをされた。

「何も考えないで、全部俺に任せてよ」

ちゅ、とついに唇にキスをされる。煙草のにおいがして、少しほうつとしてしまった。

でも、こんなのって、やつぱり……。

「ダメだよ、龍哉さん……」

「強情お」

「だつて……」

「利香ちゃんクソ真面目だからなあ。一回、おじさんとダメになっちゃおうか」

「え？」

龍哉さんに強引に押し倒され、気づけば龍哉さんが私に跨がっていた。両手首

を龍哉さんの大きな手で拘束され、抵抗ができない。

「た、つやさんっ」

「大丈夫」

「あっ……」

龍哉さんの指が、私のブラウスのボタンを上から一つ一つ外していく。布が擦れる音がいやに耳について、恥ずかしさがこみ上げた。

「やめ……っ」

「大丈夫大丈夫」

私を落ち着かせるように言い、器用に全てのボタンを外した龍哉さんはそのまま流れるようにブラのホックを外した。

彼はブラを少し上に動かすと、私の乳房を見て「可愛い乳首だねえ」と言う。一瞬で顔が熱くなってしまい、抵抗をしたくても小さな声しかでなかつた。

「龍哉さん……！」

「カリカリしちゃおうか」

「あツ♡」

「可愛い声出たねえ。利香ちゃん、乳首好きなの？ いっぱい触つてあげようね」「や、ダメつ……♡ あ、んツ♡」

「乳輪さわさわしたら、あつという間に固くなっちゃつたねえ。ほぐしてあげよう

「ひやあつ♡」

「こりつ♡ ぐりぐりつ♡」

龍哉さんの太い指が、私の小さな乳首をぐりぐり♡とこねる。その快感に声を上げてしまふと、龍哉さんは「こつちは舌でほぐしてあげるね」ともう一方の乳首をべろり♡と舐めあげた。舌の先でちろちろ♡と遊ばれたり、ぐりぐり♡と押しつぶされると下着がどんどん湿つていき、隠すように太ももを閉じる。

「んんつ♡ あ、ダメえ……つ♡ ぐりぐりしないでえつ♡」

「なあんて可愛い乳首なんだ。おじさん、こういう素直な乳首見ると虐めたくなつ

ちやうよ」

「ああツ♡ それつ、あ、やあ……つ♡」

「つねられて興奮してんの？ 利香ちゃんつたら真面目な顔してどスケベなんだ  
から。悪い子にはお仕置きしないとねえ」

「あ、んぶつ……♡ やつ、それつ、甘く噛んじやらめえツ♡ 噛みながら、あツ  
♡ べろべろしないれえつ♡」

「お仕置きされて喜んでちやダメだよ、利香ちゃん。もつとお仕置きしなきやい  
けなくなつちやう」

いつの間にか龍哉さんに掴まれていた手首は解放されていた。それに気づいた  
と同時に、龍哉さんの指が私の中にぬるり♡と入ってくる。

「あツ♡」

「あーこれはダメだ。どうしてこんなに濡れてるの？ おじさんに乳首お仕置き  
されて、どうしてこんなにとろとろになつちやつたのかなあ、悪い子だなあ利香  
ちゃん」

「ん……ツ♡ あ、んつ、ああつ……♡」

ぐちゅぐちゅ♥ ちゅぱつちゅぱつ♥

乳首を舐められながら、龍哉さんの太い指が私の中を行つたり来たりする。G  
スポットを擦られ、腰を浮かせると龍哉さんは叱るようにぢゅうつ♥と私の乳首  
を吸つた。またビクンと腰が跳ねる。

やばい、やばい、龍哉さんの指、気持ちいい。太くて、熱くて、固いのに柔ら  
かくて、私のイイところを的確に、優しく、いやらしく責めてくる。

「さつきまでダメダメ言つてたのに、もう蕩けた顔しちやつて可愛いんだから。  
おじさんの指、気持ちいい？ いーっぱい気持ちよくしてあげるからね」

「んあッ……♥ あ、やあつ♥ 龍哉さん、ゆび、ふと……つ♥ らめえつ♥」

「太いのが好き？ いやらしいねえ。おじさんのちんぽはもつと太いからね、たつ  
くさん慣らさないと」

「んう……ツ♥」

「あ、締まつた。想像した？ 想像したら子宮がきゅんつてなつちやつたの？」

「スケベな利香ちゃんかーわいい」

「あつ♥ あ、んツ♥ ご、ごめんなさ……つ♥ そこ、らめ、龍哉さんツ♥」

そここちゅこちゅしないでえつ♥」

「うんうん、いーっぱいこちゅこちゅ♥つてしようねえ。ほら、足広げて  
「ああつ……♥」

こちゅこちゅ♥ ぐじゅつ♥ じゅばつ♥

龍哉さんに足を広がられ、あられもない姿で喘がされた。太い指は私の最奥を  
こつんこつん♥かりかり♥と刺激し、そのたびに足の指まで電撃が走る。

「やあ……つ♥ た、たつやさ……つ、らめ、あつ、あ♥」

「もうイッちやうの？ おじさんの指一本で？ 可愛い雑魚まんこだね、利香ちや  
ん。奥の方こつこつ♥したらすーぐビクビク♥つてしちやうんだから」

「ごめんなさつ♥ いつ♥ イ、イッちやう、だめツ♥ 龍哉さんの指だけでつ、  
い、イッちや……つ♥」

「乳首と手マンだけで蕩けちゃつてごめんなさいは？ ごめんなさいが言えたら  
奥の方いいっぱいぐちゅぐちゅしてあげるよ」

「ご、ごめんつなさい……ツ♥ ちくびと、手マンでつ♥ とろけちゃつてますツ  
♥ ら、らめつて、言つてたのにつ、どスケベでごめんなさいいいつ♥」

「よく言えました♡」

ずちゅツずちゅツずちゅツずちゅツ♡♡

「ああツ♡ あ、やつ、んつ♡ しゅ、しゅご……つ♡ あ、あつ、あ～～～  
……ツ♡」

龍哉さんの中指と薬指が、私の中に入つて来て腔壁のイイところを全て撫でて  
いく。トロトロの愛液を纏いながら、彼の指はぬちゅぬちゅつツ♡と卑猥な音を  
立てた。

「雑魚まんこの利香ちゃん、腰へこへこでかーわいい。こちゅこちゅ気持ちいい  
ねえ」

「気持ちいツ……♡ あ、あ、やつ……♡ きちやうつ、イっちゃう、あ、あツ

♡」

「いい顔♡ 俺の手に縋り付いちやつて可愛い。ほらほら、イつていいんだよ」「あ～～～ツ♡ イくつ♡ イっちゃうつ♡ たつやさ、あ、あつ、んん……」

「あツツ♥ ～～ツ♥」

「イイところを責め立てられ、頂点まで達した快楽で私の腰は大きく弓なりになつた。ずるんつ♥と龍哉さんの指が抜け、龍哉さんはその指をべろりと舐める。

「あつま♥ 利香ちゃんのお汁、美味しいね」

「はあ……つ♥ はあ……♥」

「直にいただこうかな」

「ちよ、まつ」

予想はしていたけれど、予想通り龍哉さんは私のおまんこに顔を埋めた。私の足を大きく広げ、おまんこを間近で眺めながら「きれーな色♥」と感想を言う。

「ひくひくしてゐねえ♥」

べろつ♥

「あつ♡」

「クリトリス舐めるのと舌入れるの、どつちが好き?」

「そ、そんなの……つ」

「ここまで来て抵抗する? こーんなにとろとろ♡させちゃつて……」

つんつ♡

からかうように龍哉さんは私のクリトリスを舌で弾いた。たつたそれだけなのに快感に身体が震え、子宮は何かを待つているようにきゅう♡と収縮する。

「利香ちゃんのおまんこ、いっぱい舐めたいなあ。クリトリスペロペロ♡して、中に舌入れてぬこぬこ♡して、ぢゅうぢゅう♡吸つて、かみかみ♡して、ぐつちょぐちょ♡にしてあげたいなあ」

「あ……つ♡ んう……ツ♡」

ちゅ♡ ちゅ♡ ペロつ♡

焦らすように龍哉さんは私のクリトリスにキスをして、少しだけ舌で刺激して

くる。甘くて弱い快感に私のおまんこはぐくずく♡と疼いて止まらない。  
でも、こんなの……；つ。

「あ、そつか。でも俺、利香ちゃんの飼い主なんだつた」

「え？」

「だから俺の好きにしちゃうね」

「あ、まつ……あつ♡ あ、んつ、ぶつ♡ や、ダメつ♡ あ、んくくツ♡」

ぢゅうううううつ♡ ぢゅぢゅつ♡ ぬこつ♡

何も言つてないのに勝手に納得した龍哉さんは、私のおまんこを引き寄せてクリトリスを吸い上げ、囁み、舌で膣壁をぬこぬこ♡と可愛がつた。太ももをがつしり固定されて逃げようがない快樂に、腰がどうしても跳ね上がる。

「ん♡ 可愛い雑魚まんこ♡ ぐつちゅぐちゅに鳴つちやつてだらしないねえ」

「やつ……♡ んあつ♡ やらあツ♡ クリ吸わいでえつ……♡」

「そんなこと言つても利香ちゃんのクリは早く舐めて、吸つてつて大きくなつてるよ？ んー可愛いねえ♡ ちゅつ♡ ぢゅうつ♡」

「ああツ♥ らめ、あつ、んんツ♥ またイッちやうつ♥」

「イッちやう？ クリも好き？ ドスケベ。可愛いドスケベは乳首も一緒に虐めてあげようね」

「あ～～ツ♥ んあつ♥ しゅごつ♥ イッちやう、あつ、あ♥」

龍哉さんの指は私の乳首をぐりぐり♥をつまみ、舌はクリトリスを弄びながら時折ぢゅうつ♥と吸つた。乳首もおまんこも龍哉さんの愛撫に絆され、いくことしか考えられなくなつてしまふ。

「いくつ♥ イッちやうつ♥ あ、あツ♥ 龍哉さん……イつ、ちやう……つ♥」

「ん、いいよ。お利口さん」

ぢゅここここつ♥♥ ぢゅううううつ♥♥

「ああつ……♥ あ、んツ♥ あ、あ、いく、いくツ♥ ん♥ ～～～ツ♥♥」

ぎゅう♥と乳首を引っ張られると、その刺激で深くイつてしまつた。甘い余韻

に浸され、びしょびしょになつたおまんこを隠す氣力もなくハアハアと息をする。龍哉さんは私の頬を優しく撫でると「いい感じになつてきたね」と笑つた。

「……」

「そんな顔しないでよ。お風呂入る？」

「えつ？」

「んぐ？ お風呂イヤ？」

「！」

やられた。

当然、このあとは挿入がやつてくると思つていた。龍哉さんはそれが分かつていて、わざと「お風呂」にすり替えたのだ。咄嗟に「えつ？」なんて言つてしまつたから、目の前のおじさんはしたり顔でにんまりと笑つている。

「どうしたの？ 利香ちゃん」

いつもの優しい声だった。

あれよあれよとこんなことに連れ込まれ、あれよあれよといやらしいことをされているというのに、それだけで少し警戒心が取れてしまう。  
これが、龍哉さんのやり口なのだろうか。けれど、それでも、龍哉さんは出会つたときからずつと優しい。

「……いつか、私を売り飛ばすんですか？」

「ええ？　まさか。人身売買なんて誘拐すれば事足りるんだからさ、こんな手間と金かかることしないよ」

「こわ……」

「そういう社会に生きてるからね。だから、利香ちゃんの優しさが身に染みたんだ。この歳になると、余計にね」

「……」

「疑うなら何か証明しようか。小指詰める？」

「指輪買う？　みたいな気軽さで言わいでください……」

「利香ちゃんのためなら詰めるよつて話じやない」

私が馬鹿だつたんだろう。

看護師だからなんて高尚めいたことを掲げて、悪い男に付け込まれた。危機管理能力は高いつもりではいたけど、こんなことになるなんて。

「でも利香ちゃん、この問答必要?」

「え?」

「どうせ君は、もうここから逃げられないんだよ」

龍哉さんはにこやかにそう言つた。とても大人一人を監禁するような人間には思えない、優しい顔だ。

ああ、そうだ。馬鹿だつたんだ。きっと彼は、私を逃がしてくれないだろう。だつたらもう、このまま快樂に身を委ねたつていいんじゃないだろうか。

彼に全てを任せて、もう、この子宮から湧き上がる疼きに逆らわず。

「龍哉さん」

「ん?」

「……もう、諦めます」

「うん、そうだね」

拍子抜けするほど同意されて少しムツとした。けれど、それ以上に身体の火照りが収まらない。

彼にじゅくじゅく♡にされたおまんこが、今か今かと待っていた。

「あの……だから……」

「ん？ だから？」

「……楽しんでる」

「そりやそうでしょ。 おじさんに可愛くおねだりしてごらん。 なあんでもしてあげちゃうよ」

「……っ」

「ほら、言つてごらん」

「た、龍哉さんの……」

「うん」

「お、おちんぽを……」

「うん」

龍哉さんは私の途切れ途切れの言葉に応えながら、私の足を広げた。反り立つたおちんぽを私のおまんこに向け、入り口をずりゅ♥と擦る。

(本当に太い……ツ♥　すごい重き……こんな何度も出し入れされたら……  
♥)

「んあツ……♥」

「ごめんねえ、おじさんのちんぽ堪え性がないからさあ。利香ちゃんのおまんこに早く入りたいって疼いちやつてんだよ」

「あ……つ♥　ん……♥」

ぐちゅつ♥　ぬりゅつ♥

割れ目にそつて亀頭が上下する。そのたびにおまんこはぱくぱくと反応し、早く入れて欲しくてたまらない腰が勝手に動いてしまった。

「で、なんだつけ？」

「た、龍哉さんのおちんぽ、ください……つ♡」

「どこに？」

「利香のおまんこにつ……♡」

「利香ちゃんのどんなおまんこ？」

「利香の、あつ♡ 龍哉さんにぐちゅぐちゅにされたつ♡ 雜魚まんこに、龍哉

さんのおじさんちんぽ♡ ください……つ♡」

「よくできました♡ ご褒美だよ」

「ずりゅう……つ♡」

「あツ♡」

「これで名実ともに俺のペットだね、利香ちゃん。俺に犯されるところ、よくく  
見てて」

「あ……つ♡ はあつ……♡」

「ずりゅううう……つ♡」

龍哉さんのちんぽは、指同様太いし硬い。凶器のようなそれが、私のおまんこ

にゅうつくりと入っていく。まるで侵略してくるように、分からされているように、みちみちイツ♥と私の中を進んでいく。

「見える？」利香ちゃん。ほら、もう少しで根元までいくよ

「は……ツ♥ あ、んんつ……♥ すご……つ、みちみちって……おつきい……ツ♥」

♥

「すごいねえ、利香ちゃんの中、ぴくぴく♥つてちんぽに喜んでるよ。犯されて嬉しいの？ 悪い男に拐われて、犯されて、おまんこ喜んじやつてるの？ ドスケベ利香ちゃん」

「あツ♥ い、言わないでえ……んツ♥」

「ほーら、根元まで入る……よつ♥」

「ああ～～～ツ♥ あ、あ……ツ♥」

ぐぢゅんつ！♥と奥までちんぽをねじ込まれ、あまりの快感に甘イキをしてしまった。みちみち♥と私の中で膨張する龍哉さんのちんぽに、挿入されるだけで膣壁が喜んでしまっている。

「ちよつとイつた？ 入れただけでイつちやつたの？ 雑魚まんこだねえ」

「ご、ごめんなさ……っ」

「ピストンしちやつたらどうなるの？」

「ん……っ♥」

「想像した？ してみようか？」

ぬううつ♥

「あツ……♥」

また、ゆつくりな動きだつた。入つてきたときと同じくらいゆつくり抜かれ、  
そうやつて膣壁が擦られるたびにきゅうきゅう♥と子宮が震える。

「これをさあ、一気に奥まで入れたら、利香ちゃん嬉しい？」

「は、はい……っ♥」

「こうかな？♥」

ぐぢゅん！♥

「んんあつ♥」

「あーたまんねえなあ、利香ちゃん。腰勝手に動いちやうよ。ごめんね、おじさんいい歳こいてまだ性欲有り余つててさあ」

とんツ♥ とんツ♥ とんツ♥

身体を密着させられ、足を持ち上げられながら最奥をこつこつ♥とノックされる。指より質量のあるそれで、否応なしに口から嬌声があふれ出た。

「あツ♥ は、んつ、あ♥ あ……ツ♥」

「気持ちいいねえ、こんこん♥つてしたらエツチな声出ちやうねえ。まだ全然ゆつくりなのに、これから大丈夫？ もつと叩きつけたらどうなつちやうの？」

「ん♥ あつ、だ、だめえつ……♥ いま、されたらつ、あツ♥ おかしくなつちや……ツ♥」

「それフリ？ もつとずこずこ♥してつてこと？」

「ち、ちが……ツ♥ ほんとに、だめつ、んツ……お願い、つたつや、さ……つ

あ♡』

「ん？ すこすこ♡してほしい？」

「ちがうう……ツん♡ とんとん♡

がつ、あ、いいい……ツ♡」

「とんとん♡がいいの？ そつかあ、じやあおじさんいーっぱいとんとん♡つて

しちやおう♡ ほーら、とんとん♡ 利香ちゃんの一番奥、何回もとんとん♡し

てあげようね♡」

「あツ♡ あツ♡ らめえ……ツ♡

いつ、いっぱい、ん♡ とんとんしちやら

めえつ……♡」

「利香ちゃんがおねだりしたんでしょ？」

とちゅつ♡ とちゅつ♡ とちゅつ♡

また騙されたような気がしてならない。私からお願ひしたみたいになつてるけれど、それに抗議ができるほどの余裕はなかつた。

(しゅご……つ♡ 重いツ……♡ 龍哉さんのちんぽ、奥を叩かれたら頭真っ白になつちやう……つ♡)

何か言い返そうとする間にこちゅつ♡と奥を突かれ、そうすると頭にあつた言葉が全部「気持ちいい」に変換されてしまう。太くて重たいちゃんぽに膣がぐちよぐちよ♡と乱されるたび、思考の全てを奪われているようだつた。

「あー……最高……。利香ちゃん、すつごい顔。おじさんちんぽで蕩けちやつてるね。いつもしつかりした看護師の利香ちゃんがさあ、ヤクザのおじさんとんとん♡されてトロトロ♡になつてるんだよ? 全人類に見せつけたいね。誰にも見せないけど」

「んうツ♡ い、言わないでつ……♡ 気持ちつ、よくてツ、あつ♡ ダメえ……ツツ……んあツ♡」

「いいんだよ、ダメになつて。もう利香ちゃんは俺のペツトなんだから。愛されて甘やかされて、俺以外とは生きていけなくなるだけでいいの。だからいーっぱいダメになろうね」

「や……ツ♡ ダメだよおつ……あつ、あ♡ 龍哉、さつ……んツ、あ、あ、こんなのツ……♡」

「利香ちゃん、素質あるよ。もう少し素直になれたらしいね。薬使うのが簡単だけど、そんな無理はさせたくないし、おじさん頑張つちやうね」

「んえ……つ？♡」

「利香ちゃんをダメにできるまで、ずうつとずこずこ♡つておまんこ可愛がつてあげるからね」

「え、まつ、龍哉さ……つあ、んんツ♡」

ぱちゅつぱちゅつぱちゅつ♡

私の腰を両手で引き寄せた龍哉さんは、そこから一気にピストンの速度を上げた。お尻が浮き上がる体勢になり、逃げ場がないままちんぽをどちらもどちゅ♡どちゅと叩きつけられる。

「ああツ♡♡ は……ツあ、んう、だ、だめツ♡ んつ♡ お♡ だめ、らめ、ら、めえつ♡」

「ダメでいーの。諦めたんでしょ？ もう俺の愛ぜーんぶ受け止める気になつたんでしょ？」

「んつ♡ あ、あツ♡ は、ツ、ぐ、ごめんなさ……つ♡」

「謝らなくていいんだよ。利香ちゃんは俺にどうつどうに甘やかされて、ぐつちやぐちやにされて、最期の瞬間まで俺に縋つてりやそれでいーの」

どちゅつどちゅつどちゅつ♡

甘い言葉を掛けられながら脣奥を力一杯突かれて、頭が馬鹿になりそうだつた。本当なら仕事のこととか、将来のこととか、考えないといけないことがあるだろうに、もう龍哉さんから押しつけられる快樂のことしか考えられない。

(気持ちいいツ♡ すごいツ♡ 龍哉さんの極太ちんぽにオナホ扱いされちゃつてるツ♡ もうこのまま龍哉さんのちんぽに分からされて、ダメなどスケベまんこになつちやうんだ……ツあ♡ だめ、極太ちんぽに抗えない……つ♡)

「俺のちんぽにきゅうきゅう縋つてきてるね、利香ちゃん。イキそうなの?」  
「あツ♡ オ……ツ♡ あ、やつ、んうつ、イツ、ぐツ♡ た、つやさ、ツ、あつ♡ も、イつちや、うツ……ああつ♡」

「おつきいアクメかましちやおうね。ダメになつちやおうね。利香ちゃんはもう俺のペツトなんだよ」

「んああツ♡ きちやうツ♡ おつきいの、あつ、やつ♡」

ごぢゅツごぢゅツごぢゅツ♥♥

「あーいいよ。利香ちゃん、おじさんのちんぽでダメになつて。いっぱいイツて。全部愛してるよ」「あツツ♥」

奥を分からされながら愛を囁かれた瞬間、子宮がきゅん♥と締まつたのが自分でも分かつた。それと同時に快感が急激に高まり、龍哉さんのちんぽをきゅうきゅう♥と締め上げてしまう。

「んツ、あツ……くつ……♥」

「あー締まつた♥ 可愛い、可愛い利香ちゃん、イツて、アクメして」

「イクツ……♥ ん、あ、イツちやう……ツ♥ イく、イクツ……あツ……あ、あ、あ、うツ♥♥」

「ん……つ♥」

きゅう～～～ツ♥

腰を大きく震わせながらビクビクビクツ♡とイツてしまふと、私の締め付けに龍哉さんが少し喘いだ。じゅんじゅん♡と余韻が響く膣から、龍哉さんのちんぽがずるりつ♡と抜かれる。

「つはあ……はあ……つ♡」

「危ない危ない。搾り取られちやうところだつたよ」

龍哉さんは言いながら私をごろんとうつ伏せにし、お腹の方に手を添えた。いつの間にか龍哉さんも裸になつていて、肩から上腕にかけての刺青に初めて気づく。

(刺青……本当にヤクザだ……)

まともらない頭でそんなことを考えていると、お腹に添えられた手にぐいっと力を入れられ、龍哉さんにお尻を突き出すボーズになつてしまう。

「交尾ならこうしないとね」

「え、ま、待つて龍哉さん……つ」

「ペツトが何か言つてゐなあ」

「ちよ、あ……つ、あ、ああ／＼ツツツツ♥」

ぢゅこんツ♥

愛液でびちやびちやになつたおまんこに、後ろから突かれて情けない声が出てしまつた。さつきとは違うところに当たつて、知らない快感によだれが出てしまう。

(だ、だめ……♥　後ろからだともつと太く感じる……つ♥)

「入れただけでビクビク♥つてなつちやつてかーわいい」

「龍哉さん、ダメ、本当にダメ、まだ動かないで……つ♥」

「ペツトなのに飼い主に指図するの？」

「あツツツ♥」

ぐぢゅんつ♥♥

躊躇するみたいに最奥にねじり込まれ、目の前が一瞬白くなる。

「ご、ごめんなさい……ツ♡」

「謝らなくていいたら」

「んツ♡」

龍哉さんは私の顎を掴んで後ろを向かせ、慰めるようにキスをする。

愛されていると思わされたり、ペツトだと思わされたり、どうしたらいいんだと少し混乱した。でも、その混乱さえすぐに『気持ちいい』に支配されるからもう私は立派なペツトなのかもしれない。

「は……つ♡　んあ……♡　　んむ……ツン♡」

「あく、かわいい」

「あツ……♡」

ぐりゅぐりゅ♡

龍哉さんは舌で私の口内を愉しみながら、入れたままのちんぽをぐりぐり♡と

押しつけた。硬くて太いそれに、また膣が狭まる。

「イイとこ当たつてるの？ きゅう♡つて俺のちんぽに抱きついてきてるよ  
「やあ……つ♡ ちんぽすごいいツ、あつ、んんツ……動いちやらめえ……ツ♡」  
「俺が動いちやダメなら、利香ちゃんが動こうか」

「え……つ」

「ほら、早く。ペツトでしょ」

「んツ♡」

龍哉さんの手が優しく私のお腹を撫でる。

確かに、激しく動かれるのは正直怖い。どうにかなつてしまいそうだ。そう思つて四つん這いのまま、龍哉さんのちんぽに向かつてゆつくり腰を動かした。

「は……ツ♡ あ……、んつ……♡」

「あーエロ。利香ちゃんエロすぎ」  
「んんつ……♡」

ずろつ♥ ずろろろろろ♥  
ゆつくりでも、龍哉さんのちんぽの太さは変わらない。膣のイイところをずつ  
と擦られて、ちゃんとオナニーしているようだつた。

(気持ちい……♥ もつと欲しい……つ♥)

ずりゅ♥ ずりゅつ♥

「ちよつと速くなつたね。もつと気持ちよくなりたくなつたの？ 俺のちんぽで  
オナニーして気持ちい？」

「ん……つ♥ き、気持ちいです……ツあん♥」

「エツロ……。利香ちゃんが俺のちんぽでオナニーしてる、あのしつかり者の利  
香ちゃんが、ビニール袋全部綺麗にたたんでる利香ちゃんが」

「んあ……ツ♥ な、なんですかそれ……はツ、つあ♥」

「でも俺にはちよつと刺激が強すぎるなあ。こんなの見せられちゃつたら堪え性  
がないおじさんちんぽ、勝手に動いちゃうよ。ごめんね」

「え？ あ、んあツツ♥♥」

ぐちゅんツぐちゅんツぐちゅんツ♥♥

龍哉さんは謝罪と共に私の腰を掴み、後ろから極太ちんぽで貫いてきた。その衝撃でまたよだれが口の端から滴り、視界の端からはぱちぱちと視界の端から白い星が飛んでいく。

「あああツ♥ らめえツ♥ あつ、んツ、ん♥ しゅごツ♥ ツあ♥ ツあ♥」

「バツクが好きなんだ？ 交尾が好きなんてホント利香ちゃんは素質があるよ。俺好みのペットだ。まあ、元々全部好きだつたんだけどね」

「んツ♥ ああつ♥ らめつ♥ らめつ♥ おかしくなるツ♥」

「おかしくなるよ。お漏らししたつていいんだよ、処理も飼い主の務めなんだからさ」

「ああツ……♥ ん、んツ♥ しゅごい、しゅごいツ♥」

「しゅごいねえ、気持ちいいねえ」

ぱちゅつ♥ ぱちゅつ♥ ぱちゅつ♥

私の腰を蹂躪しながら、龍哉さんはちゅつ♥ちゅつ♥と私の背中にキスをした。

甘い痛みも孕んだそれに、殊更子宮が反応する。

「乳首も気持ちよくなろうね」

「あんツ♥ あツ♥ ぐりぐりらめつ♥ すぐイっちゃうからあツ♥」

龍哉さんの太い指が私の乳首をこねこね♥といじつたり、ぐりぐり♥と抓つたりする。熱くて硬い指とちんぽの刺激で、もうよだれを気にしている暇もない。革張りのソファは、私のよだれと愛液でてらてらと輝いていた。

「あーすぐ。利香ちゃんのおまんこ、俺の精子を搾り取ろうつてきゅうきゅう♥してるよ。こんな交尾セックス、すぐに赤ちゃんできちゃうねえ」

「や……つ♥ 赤ちゃん、らめツ♥ 外に、龍哉さつ♥ あ、ああツ♥」

「利香ちゃんたらまだ諦めてないの？ ダメになるんでしょ？」

「そんなの言つてな……ツお♥ あツ♥ はつ、あ、ツあ♥」

「ペットになるつていうことはそういうことだよ、利香ちゃん。本能のまま俺を求めて、おまんこぐちよぐちよにして、子宮に精子を注ぎ込まれるのが仕事なの。だつてそれが雄と雌のあり方でしょ？」

「あつ♥ やらあ……ツ♥ んツ♥ あ……ツは♥ おつ♥」

「聞いてる？ 賢が足りないね」

「ツああ♥」

ぐちゅんツ♥♥  
ぎゅうううつ♥

ちんぽを奥に叩きつけられた瞬間、くにくに♥と可愛がられていたはずの乳首を摘まれ、強く引っ張られた。唐突な強い快感に私の頭の中では火花が飛び散り、気づけば膣はビクビクツ♥と収縮をしていた。

「あゝ乳首イキしちやつた。今のでいくならもう否定できないでしょ、利香ちゃん」

ごちゅツ♥ ごちゅツ♥ ごちゅツ♥

イツたばかりの膣に、龍哉さんの極太ちんぽがまたピストンを激しくさせた。肘の裏から両腕を掴まれて上体を少し反らされると、さつきとはまた違う性感帶に龍哉さんが当たつてもう何が何だか分からなくなつた。

「あツ♥ あツ♥ らめつ♥ イツ♥ イツた♥ からあツ♥ おツ♥」  
「俺もそろそろイキそう……つ。利香ちゃん、奥に出すよ。おじさんの精  
受け止めてね。ペツトならなんて言うのかな?」

「お、おねがいしツ♥ ますつ♥ たつやさんのつ、んツ♥ ごしゅじんさまのつ  
♥ 精子つ、ください……ツ♥ りかのつ♥ あ、おまんこにつ♥ 全部つ♥  
くださいツ♥」

「あーやばい。どスケベ利香ちゃんクる。出すよ、利香ちゃん」

「イツ……」  
ツツ♥  
「♥

抗えない快感に敗北した瞬間、ぷしゅうつ♥と潮を噴いてしまった。私の中でビクビクツ♥と吐精を続ける龍哉さんは、荒い息のまま私の背中にちゅっ♥ちゅつ♥とキスをしている。

「はあ……ツ♥ あつ……♥」

「お漏らししちやつたねえ、利香ちゃん」

「んつ、ごめんなさ……ツ♥ はあ……つ♥」

「いいんだよ。一緒にお風呂も入ろうね」

ずりゅんつ♥と龍哉さんのchinboが抜かれたと思えば、龍哉さんの手が顔に添えられて私は自然と仰向けになつた。龍哉さんは満足そうな顔で笑つてゐる。

「好きだよ、利香ちゃん」

射精をする間際にも伝えられた言葉なのに、その真つ直ぐさに負けて思わず顔が赤くなる。

「え、可愛い。ちゅーしちやおう」

「わ、ちよ、もう……つ！」

ふざけた調子で龍哉さんはそう言うと、私に覆い被さつて何度も何度も頬や額

や唇にキスをした。さつきまでのご主人様はどこへやらだ。でも、これも彼の手口かも？

(……まあ、もういいか)

きっと私はもう手遅れなのだろう。  
憧れてなつた職業も、やりがいも、お局も、転職も、快感に溺れて酸欠になつた脳の前では、全てがどうでもいいように思えた。

「お湯張りしてくるね」

龍哉さんは最後にちゅううううつ♡と私の頬に熱いキスをかますと、ソファから降りていく。浴室に向かうと思いきや一度キツチンに寄つて、私のスマホが浸けられたお鍋を持ち上げた。

「こつちも仕上げをしておこう」

やつぱり料理をしているみたいにそう言つて、彼はお鍋に火をかけた。

やがてそれはグツグツと音を立て、中のスマホを泡で持ち上げてはコツコツと小さな衝突音をも響かせる。

噴きこぼれそうだつたからピツとボタンを押して沸騰を終わらせる。煮立つた鍋に沈むスマホは、最初から壊れていたみたいな顔をして黙つていた。

「利香ちゃん」

龍哉さんがキツチンに立つ私を見て笑う。

「お風呂鳴つたよ」

そう言つて差し伸ばされた大きな手を取つた。

いつの間にか自分でパンツを履いてるから「パンツずるい」と言つたら「脱がせて♡」なんて言われた。私はペツトなので、言われるがままにパンツを脱がせた。